

基本施策2 確かな学力の育成

施策の柱4 基礎的・基本的な学習内容の定着を図るとともに、学びに向かう力を育む

取組9 身に付けた知識・技能を活用し課題解決を図る力の育成 担当課 学校人事課、義務教育課、高校教育課

| | |
|--|---|
| ○小・中学校 全国学力・学習状況調査等、客観的な調査を活用し、各学校における学力向上のPDCAサイクルの確立を推進します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ・児童生徒を対象にした全国学力・学習状況調査の問題の解説動画とその動画を有効活用するためのリーフレットを作成・周知した。 |
| 成果 | ・解説動画の総再生回数は4000回を超え、児童生徒の学びの充実に役立てることができた。 |
| 課題 | ・全国学力・学習状況調査を活用して学力向上のPDCAサイクルの確立を推進している学校の取組を広く発信し、さらに充実していく必要がある。 |

| | |
|--|--|
| ○発達段階に応じた少人数学級編成を推進するとともに、各学校の実態や課題に応じた学力向上計画に基づく指導体制を充実します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ○「ニューノーマル GUNMA CLASS PJ」による少人数学級編成の実現【R3新規】 ・小学校1・2学年30人学級編成に138人 ・小学校3～6学年35人学級編成に181人 ・中学校1～3学年35人学級編成に231人 ○小学校教科担任制特配117名【R3新規】、小学校英語専科特配59名、学校間連携特配84名 |
| 成果 | ・小中学校の全学年を35人以下学級編成としたことで、各学校において、1人1台端末の活用が推進されるとともに、児童生徒一人一人の習熟の度合いに応じた学習指導やきめ細かな生徒指導・教育相談などを全学年でしやすくなった。 |
| 課題 | ・小中学校の全学年を35人以下学級編成とする「ニューノーマル GUNMA CLASS PJ」の利点を最大限生かし、1人1台端末を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」をより一層推進していくことが必要である。 |

| | |
|---|--|
| ○「はばたく群馬の指導プランⅡ」、「はばたく群馬の指導プラン」及び「はばたく群馬の指導プランー実践の手引きー」を活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組みます。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ・小中学校の新規採用者299名に「はばたく群馬の指導プランⅡ」を配布し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の充実が図れるようにした。 ・「ICTを活用した群馬ならではの新しい学び」の推進に向け、指導資料「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用Version」を参考にした約230事例を実践事例サイトに掲載した。 ・学習評価に関わる解説動画を「はばたく群馬の指導プランⅡ」に基づいて作成し、指導と評価の一体化について周知した。【R3新規】 |
| 成果 | ・各教科等における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりについて、県内に広く普及し、学校現場の授業改善の促進を進めることができた。 |
| 課題 | ・ICTを活用した日々の授業作りや各学校における研修で活用できるようにするため、「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用Version」の周知を一層図る必要がある。 ・ICT活用促進プロジェクトのモデル校等の先進的な取組を全県に普及し、地域差なく「ICTを活用した群馬ならではの新しい学び」を推進する必要がある。 |

| | |
|--|--|
| (高等学校) ○各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験、レポートの作成、論述等、知識・技能の活用を図る学習活動を充実します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大を想定し、基礎的・基本的な知識・技能の習得に重点を置くなど指導計画を立てた上で、観察・実験や実習等を伴う学習活動を実施した。 |
| 成果 | ・通知等により、学校の施設・設備を使用する学習活動と家庭でも実施可能な学習活動を計画的に割り振るなど、指導方法の工夫・改善について周知できた。 |
| 課題 | ・既習した知識・技能を確実に定着できるようにするためには、それらを活用する場を計画的に設定することが必要である。 |

| | |
|---|--|
| ○主体的に学習に取り組む態度を養う上で、生徒の発達段階を考慮した、思考力、判断力、表現力等を育成する学習活動を充実します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ・新規事業として「新しい学びのための授業改善事業」を実施し、学びのイノベーションリーダー研修会を3回、学びのイノベーション推進員説明会を1回、「総合的な探究の時間」担当者研究協議会を3回開催し、ICTの効果的な活用を含めた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進した。【R3新規】 |
| 成果 | ・各研修会等の開催により、校内研修の実施や教員のICT機器活用の意識等の高まりにより、授業において思考力、判断力、表現力等を育成する学習指導の充実を図ることができた。 |
| 課題 | ・主体的に学習に取り組む態度の向上に向けた、個別最適な学びの充実に向けた学習指導の工夫・改善が必要である。 |

| | |
|---|--|
| ○全ての県立高校において、生徒一人一人の学習状況や授業の理解度を把握するなど、個に応じたきめ細かな指導や、生徒一人一人の学習状況等を適切に把握して、指導の改善に生かすための観点別学習状況の評価を推進します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ・「新しい学びのための授業改善事業」において、学びのイノベーションリーダー研修会を3回、学びのイノベーション推進員説明会を1回、「総合的な探究の時間」担当者研究協議会を3回開催し、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」と「観点別学習評価等の評価方法の工夫・改善」を一体的に取り組んだ。 ・授業改善と観点別学習状況の評価について実践的に研究した学びのイノベーション推進員による取組を事例集にとりまとめた。 |
| 成果 | ・観点別学習状況の評価方法の工夫・改善を図り、生徒の学習状況をより適切に把握するとともに、評価結果をもとに指導内容や指導方法を検証することで、授業改善を一層推進することができた。 |
| 課題 | ・生徒の学習状況や授業の理解度を適切に把握する評価場面や、評価内容を生徒へフィードバックする場を、計画的に設定する必要がある。 |

| | |
|---|---|
| ○キャリア教育を念頭においた教育課程を編成し、生徒が学習意欲を高め、主体的に進路選択ができる態度を育成します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | ・公立高等学校キャリア教育・進路指導研究協議会を10月に実施し、各校の取組内容、課題等について情報共有を行った。合計66名が参加した。 |
| 成果 | ・他校の取組やキャリア教育・進路指導実施上の諸課題について情報交換を行うことで、各校のキャリア・進路指導の充実を図ることができた。 |
| 課題 | ・社会が大きく変化する中、育成すべき資質・能力を明確にしたキャリア教育を推進する必要がある。 |

基本施策2 確かな学力の育成

施策の柱4 基礎的・基本的な学習内容の定着を図るとともに、学びに向かう力を育む

| 取組10 | しっかりとした学習習慣・生活習慣の確立 | 担当課 | 学校人事課、義務教育課、生涯学習課 |
|---|--|-----|-------------------|
| ○発達の段階に応じた少人数学級編制及び少人数指導や教科担任制による授業により、児童生徒の実態に応じたきめ細かな指導を行います。 | | | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ○「ニューノーマル GUNMA CLASS PJ」による少人数学級編制の実現【R3新規】 ・小学校1・2学年30人学級編制に138人 ・小学校3～6学年35人学級編制に181人 ・中学校1～3学年35人学級編制に231人 ○小学校教科担任制特配117名【R3新規】、小学校英語専科特配59名、学校間連携特配84名 | | |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・全教室にゆとりが生まれ、児童生徒が落ち着いた雰囲気での学習ができた。 ・1人1台端末の活用が推進され、児童生徒の興味、関心、意欲等を踏まえたきめ細かな指導及び支援ができた。 ・いじめや不登校、問題行動への対応を丁寧に行えた。 ・各種特配教員の配置により、小学校における教科担任制の推進が図られた。 | | |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・小中学校の全学年を35人以下学級編制とする「ニューノーマル GUNMA CLASS PJ」の利点を最大限生かし、1人1台端末を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」をより一層推進していくこと。 ・小学校高学年を中心とした教科担任制を推進するための特配教員の在り方について、引き続き検討を続けていくこと。 | | |

| | | | |
|---|--|--|--|
| ○道徳科をはじめとする各教科等の学習活動を充実するとともに、学校段階等間の連携や、家庭・地域との連携を通して、学習習慣や生活習慣を確立します。 | | | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・「はばたく群馬の指導プランⅡ」を配布し、研修会や協議会等で周知を図った。 ・「ICTを活用した群馬ならではの新しい学び」の推進に向け、指導モデル「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用Version」を見直し、指導主事会議において、児童生徒の学びの質をより高めるための各過程ごとにおけるICTの有効な活用（場面・方法等）について共通理解を図った。 ・県内の小中学校教員に対して、日々の授業における学習評価や授業改善を支援するため、「新学習指導要領の下での学習評価の解説動画」を作成し、tsulunosuより配信した。（全体説明1本、各教科等14本）【R3新規】 | | |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・「はばたく群馬の指導プランⅡ」の周知により、小・中学校間で共通した学習過程の実践が推進されるとともに、子供の問いを生かした児童生徒主体の授業が見られている。 ・「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用Version」を見直し、ICTの有効な活用について共通理解を図ったことにより、ICTを活用することで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実がより効果的に実現できることに着目してもらうことができた。 ・学習評価の解説動画を12月現在ですで見ただけの学校が47%、今後視聴する予定の学校が53%であることから、日々の授業における学習評価や授業改善に役立てることができた。 | | |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用して、家庭と連携した学びの充実を図る必要がある。 ・家庭や地域社会の人々に協力いただいた授業や活動の事例等を紹介して連携の充実を図る。 | | |

| | |
|--|--|
| ○学校図書館の利用を促進し、家庭・地域との連携を深めながら、日常生活の中で児童生徒の読書習慣が身に付くようにします。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館に携わる職員が、学校図書館活用について学ぶため、学校図書館研修会を動画配信で開催した。(申込者：125人) ・学校司書が、学校図書館運営及び資料活用の仕方の資質向上を図り、子どもの読書活動推進に資するため、学校図書館活用講座を動画配信で開催した。(申込者：103人) ・「学校図書館充実事業」実践校において、ICT環境の充実を踏まえた学校図書館の整備や、公立図書館と連携した図書の貸し出し等の取り組みが進められた。 ・2年間の成果について、公開授業を行うとともに、HPで実践内容を紹介した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館関係者への研修等を通じて、学校図書館の役割の理解と活用を促進し、人材育成を図ることができた。 ・「学校図書館充実事業」の実践校では、司書教諭や学校図書館司書を中心に、研修会での講師招聘や本の貸与など、公立図書館との連携が推進された。 ・司書教諭や学校図書館司書等の各種研修、講座を通じて、学校図書館の役割の理解と活用を促進し、人材育成を図ることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中で読書習慣を身につけていくためには、家庭や地域との連携を具体的に推進する必要がある。 ・日常生活における読書習慣を身に付けるためには、学校支援センター活用等、地域と連携した取組を推進する必要がある。 ・学校図書館において、ICTを活用した情報センターとしての充実を図っていく必要がある。 |

施策の柱4における指標の状況、令和4年度の方向

指標の状況

| 指標 | | 策定時 | | 目標値 | 2022.4月末時点の最新値 | | 進捗率 | 備考 (進捗が芳しくない場合 や数値に大幅な上下が あった場合等、説明を記 入) |
|--|-----|-------|------|--------|----------------|------|--------|---|
| 項目 | 細目 | 数値 | 年度 | | 数値 | 年度 | | |
| 毎朝、同じくらいの時刻に起きている小・中学生の割合 | 小6 | 92.7% | 2017 | 100.0% | 91.2% | 2021 | -20.5% | |
| | 中3 | 93.1% | 2017 | 100.0% | 93.1% | 2021 | 0.0% | |
| 公立高校における中途退学率 | 全日制 | 0.7% | 2017 | 0.5% | 0.6% | 2020 | 50.0% | |
| | 定時制 | 11.0% | 2017 | 9.0% | 11.4% | 2020 | -20.0% | |
| 家庭等での学習時間が1日当たり平均1時間以上の小・中学生の割合 | 小6 | 66.3% | 2017 | 75.0% | 64.5% | 2021 | -20.7% | 携帯電話等の所持率にもなってSNSの使用率が大幅に増加した(3時間以上の使用:2017年6.6%→2021年29.8%)ことが要因の一つと考えられる。 |
| | 中3 | 72.7% | 2017 | 80.0% | 80.2% | 2021 | 102.7% | |
| 主体的・対話的で深い学びの視点に立った(はばたく群馬の指導プランに基づく)授業改善を実施している小・中学校数 | 小 | 292校 | 2018 | 300校 | 300校 | 2021 | 100.0% | |
| | 中 | 149校 | 2018 | 158校 | 158校 | 2021 | 100.0% | |
| 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を実施している県立高校数 | 高校 | 47校 | 2017 | 60校 | 60校 | 2021 | 100.0% | |

令和4年度の方向

- ・小中学校においては、コロナ禍で教科によっては学習活動に制限がある中で、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、ICT活用促進プロジェクトを推進するとともに、「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT Version」を随時更新していく。また、県教委作成の「指導と評価の一体化」に関する解説動画についての周知をさらに行っていく。
- ・高等学校においては、コロナ禍にある中で「対話的な学び」は実施方法を工夫しながら行っていくとともに、「新しい学びのための授業改善事業」を通して、各校の校内研修の充実を図り、観点別学習状況の評価の工夫・改善を一層推進する。
- ・中途退学の未然防止に向け、入学希望者に学校の特色を理解させる取組の一層の充実を図るとともに、引き続き、中高の接続に配慮した適応指導の工夫及びキャリア教育の観点を踏まえた生徒指導を一層推進する。また、SNSに頼らない人間関係づくりに係る生徒主体の活動等を通して、生徒の自己有用感や人間関係形成能力等を高めるとともに、特別活動を含む様々な活動の中で、生徒一人一人の居場所づくりに努める。
- ・学校図書館の活用を促進するため、学校図書館関係者を対象とした実務研修を開催し人材育成を図るとともに、各学校図書館への図書の団体貸出等により読書環境を充実させる。また、地域に身近な公立図書館及び公民館図書室と連携した取組により、図書館を身近に感じさせることで、児童生徒の読書習慣の定着を図る。

基本施策2 確かな学力の育成

施策の柱5 探究的・発展的な学習により社会へ参画する力を育成する

取組11 ものづくり産業等へつなげる理数教育の推進 担当課 義務教育課、高校教育課、総合教育センター

○科学に対する興味関心を高めるとともに、未知の分野に挑戦する探究心や創造性に優れた人材を育成します。

| | |
|------------|--|
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・第9回科学の甲子園ジュニア群馬県大会を開催した。(25チーム参加) ・令和3年度科学の甲子園群馬県大会を開催した。(出場校13校98名参加) ・県内4校が文部科学省のSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受け、各指定校において、将来の国際的な科学技術系人材を育成することを目指し、理数教育に重点を置いた研究開発を行った。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症拡大の影響で集合研修が難しい中、各校で取り組める事前研修や1次予選を企画・実施したことで、科学に対する興味・関心を高めるとともに、未知の分野に挑戦する態度を伸ばすことができた。 ・科学の甲子園は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、筆記競技のみの開催としたが、科学に対する興味・関心を高めることができた。 ・SSHの指定を受けた県内4校が科学的な探究活動や評価方法等の研究を推進することができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・集合研修での開催が難しい中で、科学に対する興味・関心を高め、探究する楽しさを味わえる研修会が行えるように工夫していく必要がある。 ・引き続き、県指導主事会議や教員を対象とした研修会、中学校理科研究会等で、本事業の目的や研修、大会について周知を図り、参加チーム数の拡大を図る必要がある。また、事前研修を計画するなどの工夫を行い、協働で課題に取り組み、競い合う楽しさを感じられるようにしたい。 ・SSHの各指定校において研究開発した探究活動の指導方法や評価方法について、他の高校等への普及を更に図る必要がある。 |

○日常生活との関連を重視する授業を推進し、観察・実験等、本物に触れる科学的な体験を一層充実させ、理科を学ぶことの意義や有用性を実感する機会を増やします。

| | |
|------------|--|
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業研究会や研修会等で、「はばたく群馬の指導プランII」にある日常生活との関連を重視した授業づくりについて周知した。ICTの活用については、「観察、実験の代替」としてではなく、理科の学習の一層の充実を図るための有用な道具として位置付け周知した。 ・令和3年度科学の甲子園群馬県大会を開催し、理科・数学などの複数分野において実生活・実社会と関連した課題を扱うなど、科学好きの裾野を広げる活動を実施した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業などで、日常生活との関連を重視した単元構想づくりや、直接体験など理科の学習の一層の充実を図るためのICTの活用についての共通理解を図ることができた。 ・令和3年度は県内13校98名が参加した。科学的な知識・技能を活用し、チーム内で話し合いながら競技に取り組むなど、科学の楽しさを知り有用性を実感する取組ができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症の影響の中でも、本物にふれる科学的な体験を一層充実できるよう、参考になる取組を県内に紹介し、周知していく必要がある。 ・日常生活や自然にあてはめることのできる本質を学べる科学的な体験を一層充実できるよう、今後も理科室で観察や実験をする授業が行えるよう周知していく必要がある。 ・参加者が安心・安全に実験を実施できる会場の確保と実験器具の整備が必要である。 |

| | |
|--|---|
| ○科学的に探究する力の育成のため、児童生徒が見通しをもって観察・実験、探究活動等を行う問題解決的な学習を推進します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・問題解決の活動を充実させるために、県指導主事会議において、「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用Version」の説明と周知を行った。また、問題解決の過程と評価との関連について学習評価の説明動画を作成し周知した。 ・「新しい学びのための授業改善事業」の「学びのイノベーション推進員」である理科教員2名が、「ICTの効果的な活用」と「主体的・対話的で深い学び」に基づいた観察・実験、探究活動等の探究的な学習に係る授業公開を行った。【R3新規】 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・問題解決の活動を充実させるための、ICTを活用した実践事例をwebページで情報共有することで、各学校での授業づくりに役立てられた。 ・「学びのイノベーション推進員」による授業実践の事例を収集することができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が見通しをもって観察・実験を行えるようにするためには、自分の予想や仮説を基に観察や実験の計画を立てる活動を重視した単元づくり、授業づくりを推進する必要がある。 ・より多くの教員に探究的な学習に係る公開授業への参加を促し、優れた授業実践例を広めることで、児童生徒の探究活動等を効果的にサポートする体制を構築していく必要がある。 |

| | |
|---|--|
| ○発達段階に応じた基礎的・基本的な知識・技能や科学の基本的な見方の確実な定着を図るため、小・中・高等学校を通じた理科の学習内容の系統性（連携）を重視したカリキュラムを編成します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高等学校が合同で群馬県理科研究発表会を開催した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・合同の発表会を開催することにより、各校種における理科の教育活動や学習内容について共通理解を進めることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高等学校の学びをつなぐ視点等について、各学校種の教員の共通認識を図る必要がある。 |

| | |
|--|--|
| ○数学的な見方や考え方を働かせ、数学的な知識・技能を積極的に活用する態度を養います。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・県小中学校教育研究会算数・数学部会研究大会等で、「はばたく群馬の指導プランⅡ」や学習評価、ICTの有効活用に基づく授業づくりについて周知し、問題解決的な学習を推進した。 ・全国学力・学習状況調査の児童生徒向け解説動画と教員向けの分析リーフレット、ICTを活用した授業実践例を作成し、具体的な事例を通じて見方・考え方を意識した学びの在り方を周知した。 ・群馬県高校生数学コンテストを実施し、県内の18校から513名の生徒が参加した。 ・群馬県高校生数学キャンプの開催を予定したが、新型コロナウイルス感染症の影響のため参集での実施を中止し、オンラインでの代替事業を行った。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習評価の趣旨を周知し、資質・能力を養うための単元構想の重要性について共通理解を図ることができた。 ・ICTを活用した授業実践例を小学校、中学校計39本作成した。 ・数学コンテストを通して、県内公私立の高校生等が、論理的思考力や創造力を問う問題に取り組み、解答の正しさや美しさ、発想力などを競う中で、数学的な見方や考え方のよさを認識させることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・ICTの効果的な活用により、問題解決的な学習を一層推進し、児童生徒の数学的な見方・考え方を一層意識化する授業を推進する必要がある。 ・STEAM教育の観点から、数学の学習や社会人講師による講義等を通して、学問と社会のつながりを意識し、これからの社会を担うための新たな価値を創造する力の基礎を養うことができるような工夫が必要である。 |

| | |
|-------------------------------|--|
| ○理数教育に係る教員の資質向上のための研修を充実させます。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校の教員に対しては、初任者研修（中：20名）、2年目研修（小：16名、中：7名）、4年目研修（小：5名、中：13名）、6年目研修（小：6名、中：14名）、中堅教諭研修（小：6名、中：7名）において、児童生徒が主体的に問題解決や探究を行うための単元構想や授業づくり、1人1台端末の活用等についての講義・演習・実習・協議、模擬授業、実践報告会など、経験年数に応じた研修を実施した。 ・高校の教員に対しては、初任者研修（5名）、2年目研修（7名）、3年目研修（4名）、6年目研修（7名）、中堅教諭研修（19名）において、生徒が主体的に探究する授業づくり等についての講義・演習・実習・協議、模擬授業や授業参観・研究会など、経験年数に応じた研修を実施した。 ・理科研修講座（小学校コース：7名、中学校コース：中止、高等学校コース：9名、先端科学コース：12名）、理科実習教員研修講座（4名）については、観察、実験を行う上での課題の解決法や理科の専門性を高めるための内容について、講義・実習・協議などの研修を実施した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・総合教育センターの施設・設備や1人1台端末を活用した各種研修講座を、大学等や県内学校の講師と連携したり、オンラインで実施したりすることにより、受講者の実践的指導力を高めた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・受講者のニーズや最新の理数教育に関する動向に合った研修講座とするために、ICTの活用を含め、研修講座の内容と形態を精選して運営し、受講者の声も参考にして改善を図っていく。 |

基本施策2 確かな学力の育成

施策の柱5 探究的・発展的な学習により社会へ参画する力を育成する

| 取組12 | プログラミング教育の充実、情報活用能力の育成 |
|--|---|
| 担当課 | 総務課デジタル教育推進室、義務教育課、高校教育課、特別支援教育課、総合教育センター |
| <p>○小・中・高等学校の12年間を見通して、児童生徒の系統的な情報活用能力を育成（プログラミング教育を含む）します。</p> | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・「はばたく群馬の指導プランⅡICT活用Version」に掲載した各学年の発達段階に応じた必要な端末活用スキルの育成に関わる資料や、導入初年度における指導の方針に関わる資料を、各学校において活用してもらうよう周知した。 ・小学校プログラミング教育研修講座を実施し、授業実践例（算数科、理科、総合的な学習の時間）についてオンラインによる講義を行った。 ・先進プログラミング教育推進PJ（モデル校事業）を実施した。 ・全ての県立学校の情報担当者を対象に、プログラミング（Python）の研修を行った。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・各学校において、「はばたく群馬の指導プランⅡICT活用Version」の第三章で「誰一人取り残さない学び」の実現に向けた資料、家庭学習と接続を図った授業やオンラインを活用した学びに関わる資料等を掲載したことにより、情報活用能力の育成を位置付けた教育活動が進められた。 ・小学校プログラミング教育研修講座では、オンライン講義だけでなく、算数科、理科について実習（集合研修）を行い、スキルアップを図ることができた。 ・先進プログラミング教育推進PJ（モデル校事業）では、テキストプログラミングを利用した公開授業（総合的な学習の時間）を実施することができた。 ・県立学校の情報担当教員向けの研修では、Pythonの基礎的な知識について周知することで、各校においてプログラミング教育を円滑に進めるための一助とすることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校プログラミング教育研修講座では、12年間を見通し、中学校、高等学校とのつながりや系統性を踏まえた内容を扱う必要がある。 ・先進プログラミング教育推進PJ（モデル校事業）では、総合的な学習の時間における実践内容の充実に向けて、支援を継続する必要がある。 ・端末活用スキルの育成に向けてスキル系統表の活用を啓発するとともに、資料の見直しを図る必要がある。 ・情報の収集や分析など、思考や表現に関わる能力についても検討を進める必要がある。 ・プログラミングの指導に対して不安を持っている教員も少なくないため、好事例を集める、教材を共有するなどのサポートが必要である。 |
| <p>○SNS等を介したいじめや問題行動、犯罪被害等の状況を踏まえ、保護者や関係団体等と連携し、情報社会の進展とともに変化するネット上の諸問題を教員が正しく理解した上で、児童生徒の情報モラルを育成します。</p> | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・群馬県警と連携した情報モラル講習会を県内の高等学校24校、県立特別支援学校11校（児童生徒294人、教職員190人、保護者2人が参加）で実施した。 ・ネットパトロール事業により生徒のインターネット上への不適切な書き込みを371件検知し、学校の指導を支援した。 ・「SNSに頼らない人間関係づくり」に係る生徒主体の活動を推進し、新型コロナウイルス感染症に係るいじめや、SNS等を介した問題行動、犯罪被害等の未然防止を図った。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・情報モラル講習会では、警察官による具体的な説明を聞くことで、情報モラルに関するトラブルを身近に感じることができた。 ・メールやインターネット上の交流サイト等を介したトラブルや、出会い系サイト等へのアクセスの未然防止を図ることができた。また、生徒がSNS利用上の課題やいじめの未然防止等について話し合うことにより、互いに支え合う人間関係づくりを推進することができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・SNS等を悪用した誹謗中傷、いじめの増加やネットゲームの課金、アイテム譲渡等の強要など、ネットに関係する多様な問題行動を未然に防止する必要がある。 ・1人1台端末が整備されたことを踏まえ、ICTリテラシーを高める取組を一層推進する必要がある。 ・「SNSに頼らない人間関係づくり」に係る生徒主体の活動を一層推進する必要がある。 |

| | |
|---|---|
| ○学校では、一斉学習に加え、個別学習、協働学習のためICTを有効活用します。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の心理状態を含めた健康状態を調査して収集したデータ（ライフ・ログ）を活用して、課題を抱えた児童生徒に対し、必要な支援を提供するモデル校事業を開始した。 ・県内の小中学校にモデル校（拠点校4校、実践推進校23校）を設け、公開授業や実践発表を行い、1人1台端末を活用した授業を推進した。 ・「はばたく群馬の指導プランⅡ ICT活用Version」に係る授業実践をまとめた「実践事例集」をモデル校での実践を中心に作成し、周知した。 ・学びのイノベーション推進員によるICTを活用した研究授業を各教科で行い、その内容を「実践事例集」にまとめて各校に周知した。 ・研究指定校においてICTを活用した授業についての実践・研究を行った。 ・各教科での授業においてICTを活用するためのモデル「県立高校等ICT活用モデル～Gunma Model Advanced～」を作成した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・モデル校からは、児童生徒の指導に役立ったとの意見が寄せられた。また、個別最適な学びの実現に必要な、教育データの利活用の最初の一步を踏み出すことが出来た。 ・ICTを効果的に活用した授業に加え、「家庭と連携した学び」や「オンラインを活用した学び」、「教育データを活用した学びの充実や業務改善」を推進することができた。 ・令和2年度に作成した、教育の様々な場面でICTを活用するためのモデル「県立高校等ICT活用モデル～Gunma Model Basic～」の普及を図ることにより、各校でICTへの理解が深まり、ICTの活用が進んだ。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・スタディ・ログの研究も開始し、ライフ・ログと連携した活用方法を模索したい。また、モデル校事業を全県展開した場合、巨額の費用が必要となる。 ・ICTを活用した授業実践は増えてきてはいるものの、今後は教科の特性に応じたICTの活用を図れるよう、資質・能力を育成できる学びを推進していきたい。 ・授業におけるICTの活用状況について、地域間・学校間で差が見られるため、県全体のボトムアップを図っていきたい。 ・学びのイノベーション推進員による「実践事例集」や「県立高校等ICT活用モデル～Gunma Model Advanced～」を全県に普及させ、生徒の主体的な学びにつながるICTの効果的な活用を一層推進する必要がある。 |
| ○教員の情報活用能力及びICTを活用した指導力向上のため、研修を充実させます。 | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・令和2年度に策定した、教育の様々な場面においてICTを日常的に活用するモデル「県立高校等ICT活用モデル～Gunma Model Basic～」を周知するとともに、各種研修等で活用した。 ・ICT活用指導力向上研修講座を実施した。 ・市町村教育委員会の要望に基づき、「カスタムメイド研修」を実施した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・分散登校時は、全ての県立高校においてオンライン授業を実施することができた。 ・1人1台端末を活用した授業実践例を紹介（校種別の講師）し、実践的な研修を実施することができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・教員によって、ICT活用に対する意識や指導力の差が見られるため、ICTの特性や効果の理解を図るとともに、教員の指導力向上のための指導資料や研修を充実させることが課題である。 ・1人1台端末の導入を踏まえた情報モラルに関する講義等を充実させる必要がある。 |

基本施策2 確かな学力の育成

施策の柱5 探究的・発展的な学習により社会へ参画する力を育成する

取組13 地域を発展させる大学の充実 担当課 (知)県立女子大学、(知)県立健康科学大学

(県立女子大学)
○幅広い教養と各分野の専門知識を修得し、その過程で培われる論理的かつ柔軟な思考力、豊かな人間性、そして主体的な問題解決能力を兼ね備えた人材を育成します。

| | |
|------------|--|
| 令和3年度の取組実績 | <p>コロナ禍で様々な取組が中止される中でも、次のとおり実績を上げることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文学部、国際コミュニケーション学部ともに、全体のレベルアップを目指した少人数教育を実施した。 ・人文科学や社会科学から美術まで、さまざまな学問分野の授業を開講したほか、実務家を招いた多彩な講義や、フィールドワーク等の授業も開講した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・少人数だからこそ可能な双方向でのやり取りや、議論を交えた授業により、学生に学ぶ楽しさや意欲をもたらすことができた。 ・さまざまな学問分野や、教室の外でも学びをおこなえる環境により、学生が幅広い視野を身につけることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・初年次から専門教育への導入となる基礎知識と能力を養うため、授業内容を適宜見直す必要がある。 ・学生の希望にマッチした実務家を招くことが課題である。 |

(県立女子大学)
○地域社会や国際社会に広く関心を持って地域や異文化への理解を深めるとともに、高い語学力とコミュニケーション能力、そして協調性や発信力を身に付け、持続的に社会に貢献できる人材を育成します。

| | |
|------------|--|
| 令和3年度の取組実績 | <p>コロナ禍で様々な取組が中止される中でも、次のとおり実績を上げることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外留学支援プログラムを9名の学生が利用した。 ・6名の外国語教育研究所研究員が年間66コマをネイティブ教員として担当した。 ・TOEICSW及びLRについて、国際コミュニケーション学部1～3年生の全員(205名)が受験した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン留学等、新しい形での留学支援を通して英語力の向上や異文化交流を体験する機会を提供できた。 ・日々の研究や高大接続の実践指導を重ねたネイティブの研究員による授業により、より高度な英語能力を身につける機会を提供できた。 ・TOEICの結果を勘案し、修得状況に合わせた適切な指導を学生へ提供することができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・安心安全の留学を保証することができず、渡航先を限定している。一層の危機管理システムの構築が必須である。 ・地域社会との交流を図りながら県民とともに英語を学ぶ機会(グローバルカフェ)の再開に向け、安全対策と実施方向を再考する。 ・学年が上がることによるスコアも上昇させなければならないことから、学修内容の検討をおこない、全体的なスコアアップを図る。 |

(県立女子大学)
○県立大学として求められる役割を果たすため、地域の課題解決に資する取組の強化、諸機関との多様な連携や共同研究等の推進、地域文化の振興に寄与する教育研究活動や県民の学修意欲に応える講座の充実等に積極的かつ組織的に取り組みます。

| | |
|------------|--|
| 令和3年度の取組実績 | <p>コロナ禍で様々な取組が中止される中でも、次のとおり実績を上げることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講演会講師や出前講座などの地域等との連携事業について、85件実施した。 ・群馬学センターでは、連続シンポジウムを2回オンラインで開催した。 ・地域日本語教育センターでは、日本語ボランティアスキルアップ研修を2回オンラインで開催した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・上記の地域貢献活動を通して、諸機関との多様な連携、地域文化の振興などに寄与することができた。 ・群馬学センター連続シンポジウムについて、第39回では82人、第40回では111人がオンラインで参加し、地域学の発展、地域の課題解決に寄与できた。 ・日本語ボランティアスキルアップ研修について、第1回では23人、第2回では27人がオンラインで参加し、在住外国人の日本語学習を支援しているボランティアの方々のスキルアップに寄与できた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・県立大学としての地域貢献を図るため、地域志向性を重視した活動を一層進める必要がある。 |

| | |
|--|--|
| <p>(県民健康科学大学)</p> <p>○豊かな人間性と専門知識・技術に加え、人間としての尊厳を重んじ、様々な側面から保健医療を考え、自立して判断し行動することができる看護師、保健師、診療放射線技師となる人材を育成します。</p> | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍でも可能な限り実習や実技指導に重点を置いた教育を行うとともに、従前のような臨地実習が困難となった際には、各施設との綿密な打ち合わせを行い、教育の質維持に向けた実習方法を検討し実施した。 ・社会人学生が学修に取り組みやすいよう、オンラインによる遠隔授業や研究指導などを効果的に実施した。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・各国家試験において保健師及び看護師は100%、診療放射線技師も97.1%と高い合格率を達成するなど、多くの医療人材を育成した。 ・各研究科から博士後期課程修了者を輩出するなど、より高い専門的知識や技術・技能を持つ人材を育成した。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・社会の変化や技術の高度化・専門化に対応できる医療人材を育成するため、コロナ禍にあっても教育の質を維持することが課題である。 |

| | |
|---|--|
| <p>(県民健康科学大学)</p> <p>○大学の研究成果を地域に還元し、県民の保健・医療・福祉環境の更なる向上に貢献します。</p> | |
| 令和3年度の取組実績 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域連携センター事業として実施する研修会や講習会をコロナ禍でも継続的に行えるよう、web会議システムやYouTubeなどの利用を積極的に取り入れた。 ・地域医療を担う人材を育成するために、看護師特定行為研修課程に県内病院等から4名の受講者を受け入れた。また、地域のニーズに応じるため、新たな区分を追加するための申請を行った。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域連携センター事業について、オンラインで実施する研修会や講習会を増やしたことで、限定的ながら継続的に研究成果を地域に還元することができた。 ・看護師特定行為研修課程で、病院だけでなく訪問看護ステーション在職中の修了者を輩出するなど、地域医療を担う人材の育成に貢献した。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・大学の研究成果等を継続的に地域に還元するため、コロナ禍でもより効果的に実施できる方法を引き続き検討しながら地域貢献活動に取り組む必要がある。 |

施策の柱5における指標の状況、令和4年度の方向、基本施策2に対する点検・評価委員会の主な意見

指標の状況

| 指標 | | 策定時 | | 目標値 | 2022.4月末時点の最新値 | | 進捗率 | 備考 (進捗が芳しくない場合 や数値に大幅な上下が あった場合等、説明を記 入) |
|--|----|-------|------|--------|----------------|------|---------|--|
| 項目 | 細目 | 数値 | 年度 | | 数値 | 年度 | | |
| 理科室で観察や実験をする授業を1クラス当たり週1回以上行った小・中学校の割合 | 小6 | 91.6% | 2017 | 100.0% | 77.6% | 2021 | -166.7% | 新型コロナウイルス感染症の影響 |
| | 中3 | 94.5% | 2017 | 100.0% | 72.2% | 2021 | -405.5% | 新型コロナウイルス感染症の影響 |
| 授業中にICTを活用して指導できる公立学校教員※の割合 | | 76.1% | 2017 | 100.0% | - | - | - | 文部科学省「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」の調査項目が変更されたため、比較困難。 ※参考①に参考数値を記載。 |
| インターネット利用時に守るべきルールやマナーを身に付けている小・中学生の割合 | 小 | 95.4% | 2017 | 100.0% | - | - | - | 県教委調査「児童生徒の学習・生活実態調査」の実施を中止したため、比較困難。 ※参考②に参考数値を記載。 |
| | 中 | 96.6% | 2017 | 100.0% | - | - | - | |

(参考)

| 指標 | 基準値 | 目標値 | 2022.4月末時点の参考数値 | | 進捗率 | 備考 | |
|---|---------|--------|-----------------|-------|------|-------|--|
| ①授業中にICTを活用して指導できる公立学校教員※の割合 | (68.2%) | (2019) | 100.0% | 65.8% | 2020 | -7.5% | (※ICTを活用して指導できる教員：PCや提示装置などを活用して資料や児童生徒の意見などを効果的に提示したり、知識・技能の定着、考えをまとめる活動、レポート・資料・作品等の協働制作などの学習の際に、児童生徒にPCやソフトウェアなどを効果的に活用させたりできる教員) |
| ②携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っている小・中学生の割合 | | | 100.0% | 79.4% | 2021 | - | 全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙 調査対象：県内小6・中3 ※数値は(約束を守っている人) / (携帯電話を所持している人) ※携帯電話・スマートフォンやコンピュータを所持していない児童生徒 小学校 13.2% 中学生 7.8% |
| | | | 100.0% | 71.7% | 2021 | - | |

令和4年度の方向

・高等学校等では、「県立高校等ICT活用モデル～Gunma Model Advanced～」を各校に周知し、令和3年度に配布した「Gunma Model Basic」と併用して、各種研修会や協議会、校内研修等で活用し、授業でのICT活用を推進する。

・プログラミング教育において、プログラミング言語の習得ではなく、コンピュータに自分の意図した動きをさせるために、どのような命令を、どのように組み合わせ、かつどのように改善していくかを論理的に考える力をつけることが重要であることを、今後も引き続き、研修等を通して教職員に伝えていく。

(女子大)

新型コロナウイルス感染症への対策を徹底しつつ、次のとおり取組を進めたい。

・可能な限り対面による授業を行うとともに、遠隔授業を通して、より広範かつ多くの教育の機会を設けて教育の質向上に寄与できる体制等の整備を検討し、教育の質の担保に努める。

・安全対策と危機管理を徹底した上で、コロナ感染症の比較的落ち着いた地域への留学を再開する。

・留学が困難な場合においても、学生の語学力の向上が図れるよう、学内における教育方法等施策を検討する。

・地域や社会に開かれた大学にすべく、地域住民や高校との連携を進めていく。

(健科大)

・コロナの感染拡大状況に応じた感染対策を取りながら、実技科目を中心にできる限り対面授業を行うとともに、コロナ禍においても教育効果を高められるよう、対面授業と遠隔授業を効果的に組み合わせる方法を検討する。

・ICTを活用するなど実施方法を工夫して、コロナ禍においてもできる限り、公開講座をはじめとする地域貢献事業を行う。

基本施策2に対する「群馬県教育委員会の点検・評価委員会」の主な意見

評価できる点

・本県における情報モラル教育は非常に進んでおり、ストーリー仕立ての動画教材や、オープンエンドのweb教材を活用する等、積極的な取組がなされている。

課題

・ICT活用に係る指導用資料について、教員がより具体的なイメージを持って授業で活用できるよう、掲載内容を工夫するとよい。

・ICT活用について、積極的な活用が期待される若手教員への支援と併せて、教職課程に在籍する学生も学べるような機会があるとよい。